武蔵野日曜聖書講筵

パウロの第一回伝道前半

――使徒行伝第13章――

１９９１年９月８日
小池辰雄

普通の現実と本当の現実　超イズム　私の言葉は逆説的なもの　私の為だけの福音　断食は聖霊を食べるため　神さまの審判　パウロの演説　キリストの十字架と復活　義を与えられるキリストわが内に在りて　永遠の生命を受ける　神の無相の相

【使徒13】

1アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。2彼らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業のためにバルナバとサウロとを選び別て』3ここに彼ら断食し、祈りて二人の上に手を按きて往かしむ。

4この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに渡り、5サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨハネを助人として伴う。6遍くこの島を経行きてパポスに到り、バルイエスというユダヤ人にて偽預言者たる魔術者に遇う。7彼は地方総督なる慧き人セルギオ・パウロと偕にありき。総督はバルナバとサウロとを招き神の言を聴かんとしたるに、8かの魔術者エルマ（この名を称けば魔術者）二人に敵対して総督を信仰の道より離れしめんとせり。9サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、10『ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、11視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに朦と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。12ここに総督この有りし事を見て、主の教に驚きて信じたり。

13さてパウロ及び之に伴う人々、パポスより船出してパンフリヤのペルガに到り、ヨハネは離れてエルサレムに帰れり。14彼らはペルガより進み往きてピシデヤのアンテオケに到り、安息日に会堂に入りて坐せり。15律法および預言者の書の朗読ありしのち会堂司たち人を彼らに遣し『兄弟たちよ、も

し民に勧の言あらば言え』と言わしめたれば、16パウロ起ちて手を揺して言う、
『イスラエルの人々および神を畏る者よ、聴け 17このイスラエルの民の神は、我らの先祖を選び、そのエジプトの地に寄寓せし時、わが民をおこし、強き御腕にて之を導きいだし、18凡そ四十年のあいだ、荒野にて、彼らの所作を忍び、19カナンの地にて七つの民族をほろぼし、その地を彼らに嗣がしめて、20凡そ四百五十年を経たり。此ののち、預言者サムエルの時代まで審判人を賜いしを、21後に至りて彼ら王を求めたれば、神は之にキスの子サウロと云うベニヤミンの族の人を四十年のあいだ賜い、22之を退けて後、ダビデを挙げて王となし、且つこれを証して「我エッサイの子ダビデという我が心に適う者を見出せり、彼わが意をことごとく行わん」と宣給えり。23神は約束に随いて此の人の裔よりイスラエルの為に救主イエスを興し給いしが、24その来る前にヨハネ預じめイスラエルの凡ての民に悔改のバプテスマを宣伝えたり。25斯てヨハネ己が走るべき道程を終えんとする時「なんじら我を誰と思うか、我はかの人にあらず、視よ我に後れて来る者あり、我はその靴の紐を解くにも足らず」と云えり。26兄弟たち、アブラハムの血統の子ら及び汝等のうち神を畏るる者よ、この救いの言は我らに贈られたり。27それエルサレムに住める者および其の司らは、彼をも安息日ごとに読むところの預言者たちの言をも知らず、彼を刑いて預言を成就せしめたり。28その死に当るべき故を得ざりしかどピラトに殺さんことを求め、29彼につきて記されたる事をことごとく成しおえ彼を木より下して墓に納めたり。30されど神は彼を死人の中より甦えらせ給えり。31斯てイエスは己と偕にガリラヤよりエルサレムに上りし者に多くの日のあいだ現れ給えり。その人々は今、民の前にイエスの証人たるなり。32我らも先祖たちが与えられし約束につきて喜ばしき音信を汝らに告ぐ、33神はイエスを甦えらせて、その約束を我らの子孫に成就したまえり。即ち詩の第二篇に「なんじら我が子なり、われ今日なんじを生めり」と録されたるが如し。34また朽腐に帰せざる状に彼を死人の中より甦えらせ給いし事に就きては、斯く宣給えり。曰く「われダビデに約せし確き聖なる恩恵を汝らに与えん」35そは他の篇に「なんじは汝の聖者を朽腐に帰せざらしむべし」と云えり。36それダビデは、その代にて神の御旨を行い、終に眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐に帰したり。37然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐に帰せざりき。38この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。39汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆この人によりて義とせらるる事を。40然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者たちの書に云いたること来らん。

41 曰く「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つ
の事を行わん。これを汝らに具に告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」
42 彼らが会堂を出づるとき、人々これらの言を次の安息日にも語らんこと
を請う。43 集会の散ぜし後ユダヤ人および敬虔なる改宗者おおくパウロとバ
ルナバとに従い往きたれば、彼らに語りて神の恩恵に止らんことを勧めたり。
44 次の安息日には神の言を聴かんとて殆ど町こぞりて集まりたり。45 然どユ
ダヤ人はその群衆を見て嫉に満たされ、パウロの語ることに言い逆いて罵れ
り。46 パウロとバルナバとは臆せずして言う『神の言を先づ汝らに語るべか
りしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相応しからぬ者と自ら定むるに
よりて、視よ、我ら転じて異邦人に向かわん。47 それ主はかく我らに命じ給
えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救いとならし
めん為なり」』48 異邦人は之を聴きて喜び、主の言をあがめ、又とこしえの生
命に定められたる者はみな信じ、49 主の言この地にあまねく弘りたり。50 然る
にユダヤ人ら、敬虔なる貴女たち及び町の重立ちたる人々を唆かして、パウ
ロとバルナバとに迫害をくわえ、遂に彼らを其の境より逐い出だせり。51 二
人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。52 弟子たちは喜悦と
聖霊とにて満たされ居たり。

●普通の現実と本当の現実

私は正直、詩の世界に入りますと、普通の現実の中に居ないんです。詩の世界に入っていると、そこが私にとっては本当の現実になる。ですから、夜、夢の中で非常に不思議な夢を時々見させられる。それがやはり上からの示しなんです。ダンテやゲーテは私の相手ですが、詩としては、あの大詩人にはかなわないと思いますけれども、内容的には彼らのとはまた別なものが展開いたしつつあります。これが完成するまでは、私は絶対に死にません。それがこれから何年かかるかは知りません。大体のところは、２００４年、百歳までにその頃にでき上がるでしょう。できなければ、まだ続きます。もう自分でボケるなんてことは全然考えていません。ですから、普通の人が見たら、ぼけものみたいなわけです。

これは本当に、御霊の世界の凄さというものは、絶対に身をもって証明しなければならない。今までの無教会の信仰では――それは、内村鑑三、藤井武、塚本虎二、みな一流の方々です、特に内村鑑三は――けれども、やっぱり人間の側の限定がある。その限定を突破する。それは、今日からやるこのパウロはそれを全く突破させられた。キリストをぬいては、パウロにかなう者はいないでしょうね。

そういうことで、我々の賜っているところの使命、信仰の現実でははっきり、キリストの直弟子の次元を、みんな遠慮なく進んでいただきたいと、こう思っているわけです。

●超イズム

ある一つの夢は、ゴルバチョフとブッシュ、あの二人に私は逢うんです。そして、この二人に、

「あなた方、素晴らしいことをやってくれて、是非とも、本当の握手をして、そして、もう軍備なんてことは全然問題にしない、ペレストロイカのもうひとつ次元の高い――いわゆる民主主義ではダメだ――本当に神さまでもって動いている、その大政治家に、二人とも是非なっていただきたい」

なんて、私が言っているんだよ、この二人に。そういう夢を見るんですね。私は別に預言者きどりでも何でもない。そうすると、本当に向こうは、二人とも喜んでいるような顔をして聞いてました。

もう、今はいわゆる人間的な遠慮はいらない。是非とも、皆さんは、この召団の人たちは、いよいよ進んでいただきたい。

今度の新しい新ロシアのエルツィンが、共産主義でもなく民主主義でもなく、

「私は一切の主義は持ちません」

と言った。さすがに、彼は凄いやつだ。うれしいことを言った。

「主義」というものにこだわっているうちはダメなんです、何主義であろうと。

「イズムから抜けなくてはダメだ」

ということはゲーテが言っています。イズムにはそれぞれの真理性があります。けれども、必ず限界がある。イズムそれ自身が悪いとは言わないけれども、その限度がはっきり分かって、必ずそれを乗り越えた世界を持たなければ、またそのイズムを本当に善用することもできない。

超イズムの世界、超神学の世界。本当の神学は神学を笑わなくてはいけない。そういう「超」の、一切の限定のない世界を本当に天的な自由をもって展開なさったのは、もう言うまでもなく、キリストですから。お釈迦さんはキリストにはかなわないです、とても。そういう意味で、私たちにとっては、キリストは宇宙大というか、宇宙よりも大きいと言いますか、もう大変な存在ですから。だから、我々が「キリスト」と言う時には、その中に、キリストの中に自分を入れる。また、キリストは入ってくださる。パウロが言っているとおり。我々みたいな相対的なダメな野郎の中にこそ、いよいよ遠慮なしに入ってくださる。皆さんも、もう「自分の信仰」なんてものはやめた方がいいですね。

●私の言葉は逆説的なもの

私の言葉は非常に逆説的なものです。そうすると、

「無」

というものはもの凄い、凝集している世界なんです、焦点が。焦点があるんですよ。「無」

と言ったって、虚無じゃないですから。無の焦点というのは凄い焦点です。これは聖霊が結ぶところの焦点で、この焦点が燃えているから、次第に展開が始まるんです。

「**神を愛することと隣りを愛することは一つだ**」

とキリストが言われたが、全部、「ざるを得ない」世界です。愛せざるを得ない、助けざるを得ない、与えざるを得ない。電車の中でも、私はそのことを経験しますよ。私よりか明らかに若い人でも、私は、少し向こうが力がないと思ったら、

「どうぞおかけください」

と私は席をゆずりますからね。また、私が少し年寄りに見えるとみえて譲ろうとするから、

「いや結構です、ありがとうございます」

と私は坐らない。今頃で、譲られて坐るようなことでは、私は百歳を突破するわけにはいかない。

そういうことで、何といいますか、ありがたくて、力が来て、「しょうがない」と言うよりかしょうがない。

K君が

「小池先生は、ある瞬間に、雑巾に見えた」

と書いた。

「君はいいことを書いてくれたね。私は正に雑巾だよ」

と私は返事を書いた。パウロは

「我は罪びとの首（かしら）なり」

と言った。内村鑑三も、戦場ケ原の会話でもって、

「私みたいな野郎が救われたんだから、万人は救われるんだ。万人救済論は自分が罪びとの首だからだ」

と言った。さすがは内村先生です。内村先生というのは、正直、非常に圭角の強い人ですから。だから人を躓かせたりいろいろする。矛盾を平気で言う人だから。昨日言ったことと今日言ったことが違う。けれども、その瞬間においては、先生は絶対に偽っていない。矛盾にみえて、本当は矛盾ではない。そういう魂だね。私も、とにかく、自分なんてものは考えてない。どん底にいる。

●私の為だけの福音

だから、親鸞の『歎異鈔』の終りのあの言葉は素晴らしい。

「弥陀の五劫思惟はひとえにこれ親鸞の為のみである」

という有名な言葉。

「弥陀の五劫思惟は私のことだけを思ってのことだ。だから、仏道の真理は全部私の為だったんだ」

と。あの告白は本当のどん底の告白なんです。だから親鸞は凄いことになった。あの『歎異鈔』のあの言葉は、あなた方一人一人、我々クリスチャン一人一人が、本当に受けとって、

「福音は私だけの為であった。キリストは私の為に福音してくださった。十字架にかかられた。聖霊をくださった」

と。マルチン・ルターも、質的にはその点に気が付いたんです。

そういうように、福音は、「神・キリスト・我」の絶対の世界で、他の比較は何も要らないんです。私はあの人よりもどうだこうだと、そんなことは要らない。「罪びとの首」ということは、この「首（かしら）」という字は、

「他との比較を絶した世界」

だということです。

「他の人のことは知らない。私は罪びとなんだ。だから、そのための福音なんだ」

と。だから、もの凄く力が来る。光が来る。

本当の神学は枠を知らない神学なんです。だから、「ドラマ」だと私は言っているので、絶対に「組織」じゃない。聖書の「解釈」じゃないんだ。読むほどに、「告白」させられるだけのはなし。

「こういうように解釈しなければならない。これはどうだ。これは果たしてパウロが言ったか言わないか」

と、そんなことはひとつも要らん。

本当の自由とは、神さまから来ているところの他に自由はない。普通に言っている「自由」なんてものはとんでもないんだ。みな自己に捕らわれているところの自由で、ひとつも自由じゃない。このことを身をもって段々体験してもらいたい。真理というものは、自分で体験するまでは、決して本ものにならないんですから、聞いただけではね。

そういうような角度でもって、どうぞ皆さんは、いよいよ、召団の各人は勇ましく進んでいただきたい。私はいつ仆れるか知らんけれども、この召団は、その気合でいくならば、召団の在り方はどうであろうと、必ず続いていきます。

「こういうような在り方をしなければならない」

なんていう規定はひとつも要らん。そういう意味において、十二が、十一になろうが、八になろうが、いくつになろうが、一向に差し支えない。それだけの、キリストを持つという、キリストに捕らえられるということは何と驚くべきことかということを、いよいよ、そして、必ず告白してください。「感話会」ではないんですよ、あれはみな本当は「告白会」なんです。そういう生き方をしていなければ、告白が出てこないんですよね。

●断食は聖霊を食べるため

それでは、使徒行伝の第13章からパウロに入ります。今日のところはパウロの第一回伝

道の前半ですね。

1アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。2彼らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業のためにバルナバとサウロとを選び別て』3ここに彼ら断食し、祈りて二人の上に手を按きて往かしむ。

エルサレムの教会は、どちらかと言うと、まだユダヤ教の伝統的なものが残っているんですよね、新しく福音を受けたというものの。だから、純粋なのはむしろこのアンテオケの方なんです。アンテオケ教会には別に中心の人はいないんで、幾人かの人で共同にやっていた、いわゆる信徒教会だね。バルナバというのはクプロ島の生まれの人ですが、これは相当富裕な人でもあったらしい。「ニゲル」というのは黒人です。「クレネ」はアフリカの北の方だ。「ルキオ」というのはアフリカ人だ。「マナエン」はヘロデの兄弟ですから、これはだいぶん高位の人ですね。「預言者」というのは、旧約の預言者とは違う。「教師」の上が「預言者」、その上が「使徒」。バルナバがむしろサウロを呼んだようなことで、なかなかバルナバというのは有力な信仰を持った異邦人というわけだ。

「断食したるとき聖霊が臨んだ」

という。断食は聖霊を食べるためなんで、ただやせ我慢して食を断つということではない。ご飯の代わりに聖霊を食べる。

「我を食らえ、我を飲め」

とキリストは言われたけれども、水を飲む時は、聖霊という水を飲む。そういうつもりで断食する。御霊を本当に受けとるためには、食を断たざるを得ないという。これも、ざるを得ない断食だね。楽しんでやるわけだ。

それで、御霊の示しでもって、バルナバとサウロが選ばれて、皆で手を置いて按手して送った。

4この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに渡り、5サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨハネを助人として伴う。

ユダヤの教会のことを「シナゴーグ」という。キリストもシナゴーグでよくお話なさった。「ヨハネ」とはもちろん、あのヨハネではないです。マルコというヨハネです。使徒行伝の12章の25節に出ているヨハネです。

●神さまの審判

6遍くこの島を経行きてパポスに到り、バルイエスというユダヤ人にて偽預言者たる魔術者に遇う。7彼は地方総督なる慧き人セルギオ・パウロと偕に

ありき。総督はバルナバとサウロとを招き神の言を聴かんとしたるに、8**かの魔術者エルマ（この名を称けば魔術者）二人に敵対して総督を信仰の道より離れしめんとせり。**9**サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、**10**『ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、**

「バルイエス」というのは、「救いの子」という意味ですよ。「エルマ」というのは「魔術者」という意味です。

「サウロ又の名はパウロ」

外国伝道だから、これからはもう「パウロ」と称う。ラテン系の名前です。「パウロス」というのはギリシヤ語ですけれども。

11視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに曚と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。

と、これは神さまの審判にあったね。ペテロも、ペテロの前で偽ったアナニヤ夫妻がたちどころに倒れて死んでしまった。だから、聖霊をあなどると恐ろしいことになる。

12ここに総督この有りし事を見て、主の教に驚きて信じたり。

驚いて信じた。分かるの分からないのではない。これはみな参るんです、降参するんですね。

「これは参った！」

と。人間は本当に全身で降参するまでは、本当の世界には入れない。

「まぁ、そうか、それならしょうがない、信じておこう」

なんてのは、ちっとも信仰じゃない。魂の世界の現実というものは、いかにゴマかしがきかないかということは、それで分かる。頭の世界とは違うんです、この魂の世界は。

13さてパウロ及び之に伴う人々、パポスより船出してパンフリヤのペルガに到り、ヨハネは離れてエルサレムに帰れり。

マルコというヨハネは離れてエルサレムに帰った。ここの所は相当、山賊やなんかが出る。それで、どうも少し恐くなって帰ったんじゃないか、とそういうことを言う人がありますが。まぁ、パウロはいろんなものにでっくわしますけれども、この御霊の力でみんな勝ってしまう。

●パウロの演説

14彼らはペルガより進み往きてピシデヤのアンテオケに到り、安息日に会堂に入りて坐せり。15律法および預言者の書の朗読ありしのち

「律法および預言者」

というと、これは旧約聖書のこと。もう律法が先になると――モーセに示されたものがね

――律法をいわゆる律法にしてしまったのが本当は大間違いなんだ、旧約は。モーセだって本当は、これは預言者なんだ。だから、賜りたるものは決して儀文じゃない。霊的な内容なんです。それをみんな儀文にしてしまって、いわゆる律法にしてしまったから、硬化現象を起こしてしまった。

会堂司たち人を彼らに遣し『兄弟たちよ、もし民に勧(すすめ)の言あらば言え』と言わしめたれば、16**パウロ起(た)ちて手を揺(うごか)して言う、**

このパウロの演説が大変だ。41節まで、大演説。これは、ステパノがこういう歴史的な演説をやった。あれと同じですよ。ステパノのあの歴史的演説と同じように、パウロもここでやるわけだ。ずっと今までの歴史を――これを一々内容的に言ったら大変ですが――一応、ちょっと読んでおきましょう。

『イスラエルの人々および神を畏るる者よ、聴け17**このイスラエルの民の神は、我らの先祖を選び、そのエジプトの地に寄寓(やどり)せし時、わが民をおこし、強き御腕にて之を導きいだし、**

モーセを通してね。ステパノも同じようなことを言っている。

18**凡そ四十年のあいだ、荒野にて、彼らの所作(しわざ)を忍び、**

特に「忍び」と書いてある。大分、神さまに叛(そむ)くようなことをやっていたから。

19**カナンの地にて七つの民族をほろぼし、**

約束の地に行って、そこの先住民族の七つの民族をやっつけてしまった。こういうことを書いてあるものですから、

「一体ユダヤ人というのは勝手なことをする。先住民族を滅ぼしたり。だから、パレスチナ問題も起きるんだ。神さまはそんなことを、一体、剣をもって人を、今まで住んでいた奴をおっぽり出してしまうというのは、それが本当の神さまか」

なんて、そう思うわけです。また、そう思うのも無理もないはなしなんです。歴史というものは随分、矛盾的な要素がある。だから、ドラマだと言うんです。それを直接にただ善いとは言いません。とにかく、

「神さまの命令でそうした」

というんだ。

その地を彼らに嗣(つ)がしめて、20**凡そ四百五十年を経たり。**

これはユダヤ人の考え。この「四百五十年」というのは士師記時代のことです。王国の前。詳しくは、四百五十年もそんなにない。

此ののち、預言者サムエルの時代まで審判人(さばきびと)を賜いしを、21**後に至りて彼ら王を求めたれば、神は之にキスの子サウロと云うベニヤミンの族(やから)の人を四十年のあいだ賜い、**22**之を退けて後、ダビデを挙げて王となし、且つこれを証して「我エッサイの子ダビデという我が心に適(かな)う者を見出せり、彼わが意(こころ)を**

ことごとく行わん」と宣給えり。

初代の王さま、サウロですね。それから、ダビデが王となった。ダビデも悪いことをやったけれども、全体としては、神への信仰を貫いた。何といっても、これは救いの器です。救主の、メシヤの前兆ともなる人ですからね。

23神は約束に随いて此の人の裔よりイスラエルの為に救主イエスを興し給いしが、

これはもう、イザヤ書の預言――まぁイザヤに限りませんけれども――特にイザヤの預言のとおり。

24その来る前にヨハネ預じめイスラエルの凡ての民に悔改のバプテスマを宣伝えたり。

福音書の最初に出ている。

●キリストの十字架と復活

25斯てヨハネ己が走るべき道程を終えんとする時「なんじら我を誰と思うか、我はかの人にあらず、視よ我に後れて来る者あり、我はその靴の紐を解くにも足らず」と云えり。

みんな、福音書に書いてある通りだ。

26兄弟たち、アブラハムの血統の子ら及び汝等のうち神を畏るる者よ、この救いの言は我らに贈られたり。

悔改め、立ち帰りの水のバプテスマをした。キリストはそれを受けながら、聖霊のバプテスマを受けてしまった。

27それエルサレムに住める者および其の司らは、彼をも安息日ごとに読むところの預言者たちの言をも知らず、彼を刑いて預言を成就せしめたり。

十字架のことです。イザヤ書53章にあるとおり、キリストは十字架にかかられた。みんな、キリストは全部それを自分のこととして受けとって、それを実際なさったわけですから。

28その死に当るべき故を得ざりしかどピラトに殺さんことを求め、29彼につきて記されたる事をことごとく成しおえ彼を木より下して墓に納めたり。30されど神は彼を死人の中より甦えらせ給えり。31斯てイエスは己と偕にガリラヤよりエルサレムに上りし者に多くの日のあいだ現れ給えり。その人々は今、民の前にイエスの証人たるなり。32我らも先祖たちが与えられし約束につきて喜ばしき音信を汝らに告ぐ、33神はイエスを甦えらせて、その約束を我らの子孫に成就したまえり。即ち詩の第二篇に「なんじら我が子なり、われ今日なんじを生めり」と録されたるが如し。34また朽腐に帰せざる状に彼を死人の中より甦えらせ給いし事に就きては、斯く宣給えり。曰く「われダビデ

に約せし確き聖なる恩恵を汝らに与えん」[35]**そは他の篇に「なんじは汝の聖者を朽腐に帰せざらしむべし」と云えり。**[36]**それダビデは、その代にて神の御旨を行い、終に眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐に帰したり。**[37]**然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐に帰せざりき。**

キリストは甦って、死んだのではない。朽腐に帰しなかった。キリストは死骸とはならない。復活した。

●義を与えられる

[38]この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。[39]**汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆この人によりて義とせらるる事を。**

パウロの中心が、この言葉ですね、

「キリストを信ずることによって義とされる」

という。この「キリストを信ずる」というのは、

「十字架の贖いと復活のキリストを受けとる」

ということです。そうすると、義を賜る。キリストの義をたまわる。義というのは神さまとの義しい関係、および、その内容。だから、もちろん愛もその中に入る。ただ、ユダヤ人は、この義という言葉が非常に中心になっているからね、それで、義という。内容はずっと変わってきます。福音的な義は、旧約の義とは違う。義という言葉に躓くんだよね、クリスチャンは。それで観念化してしまう。この

「義とせられたり」

という言い方は、実はどうも観念的にとられる。本当は

「義を与えられる」

んです。義はもの凄い力であるし、光であるし、生命である。そういうものを義と言いたいんだけれども、パウロがこうやってしゃべっている時は、相手がユダヤ人だものだから、神さまとの義しい関係、また、人との義しい関係を、義という。そういう角度からの、義の意味が強い。

それだけでは、実はダメなんだよ、本当はね。パウロの現実は、その義が聖霊によって本当に受けとられると、内容がキリストの生命そのもの、知恵そのもの、光そのもの、愛そのものになる。それが私たちに具体的に生きなければ、本当は救われているとは言えないんだよな。

私は永いこと無教会にいたときに、

「信仰によって義とされる」

という、

「罪からあがなわれた」
という、命題的な信仰なんだよな。いつまでたったって、なんだか本当の力が来ない。結局、聖霊が欠けているから。パウロはコリント前書15章で、復活のキリストを非常に強調しているけれども、御霊のキリストを本当に強調しているところは、これはロマ書の8章です。聖霊の人にならなかったら、どうにもならないんだ、
「義とされた」
なんて言ったって。ところが、一般のクリスチャンは、
「信仰によって義とされる」
という、
「十字架の贖いを受けて義とされた」
ということを思い込んでいるだけのはなしで、むしろ逆にパリサイだ。無教会にも、やっぱりそういう雰囲気がかなりあった。だから、何か足りないと私は思っていた。

●キリストわが内に在りて

40然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者たちの書に云いたること来らん。41曰く
「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つの事を行わん。これを汝らに具(つぶさ)に告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」
42彼らが会堂を出づるとき、人々これらの言を次の安息日にも語らんことを請う。43集会の散ぜし後ユダヤ人および敬虔なる改宗者おおくパウロとバルナバとに従い往きたれば、彼らに語りて神の恩恵に止らんことを勧めたり。
44次の安息日には神の言を聴かんとて殆ど町こぞりて集まりたり。45然どユダヤ人はその群衆を見て嫉(ねたみ)に満たされ、パウロの語ることに言い逆いて罵(ののし)れり。

とんでもないことを言っている、とこういうわけだ。特に復活のことでしょうね。

46パウロとバルナバとは臆せずして言う『神の言を先づ汝らに語るべかりしを、汝等これを斥(しりぞ)けて己を永遠の生命に相応(ふさわ)しからぬ者と自ら定むるによりて、視よ、我ら転じて異邦人に向かわん。

ユダヤ人はいつまでたっても受けとらない。律法の中に居ている。永遠の生命に相応しくないと自分で思っていると。
これは観念信仰では、
「罪びと、罪びと」
と、ただそういった側ばっかり強調して、そして、
「罪のゆるし」
ということばっかり言っている。「罪びと」なんていうのは、もう分かりきったはなしだから、

問題は、新しくキリストの生命の中に入って、

「**我れキリストのうちに、キリストわがうちに生き給うなり**」

というパウロの、この角度を本当に強く、無教会では私は聴きませんでした。ガラテヤ書の2章20節の、あの素晴らしい、

「**われキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず、キリストわが内に在りて生き給うなり**」

という、これはプロテスタントの金科玉条なんだよな。ところが、

「**キリストわが内に在りて生き給うなり**」

ということを形容詞だと思っている。パウロは、形容詞じゃないんだ。御霊のキリストが、キリストの御霊が私の中に生きていらっしゃると。

これが本当に告白できていなかったんです、無教会時代は。或る信仰の強さは持っているんです、無教会というのは。それは人間の側の信仰の強さだ。くたびれるんだ、そんなのは。

「信仰をしっかり持っていなくてはいかん」

なんて、信仰にこだわる。信仰の世界もわたくしされている。

信仰とは何ですか。キリストがもの凄い方である、その前に本当に平伏しているのが、信仰なんだ。だから、

「どうぞ私の中に入ってください、あなたと一つになりたいんです」

と。これが信仰なんだ。一つにならない信仰なんて、本当は信仰ではない。だから、私は

「一如」

という言葉が好きなんだ。

我々の鼻を通して、空気と我々の身体は一つになっている。寝ても空気を吸っている。それが本当の肉体の現実なんだ。魂がキリストの霊を呼吸する、祈りの世界で。それが現実でなかったならば、信仰なんていうのは頭の思われた世界で、思われた世界ではどうにもならん。どうにもならないから、いつまでたっても始まらない。事実が証明している。本当にどうかなっていると、今度は、どうかなっていることがそこに現じてくる。私は、パウロさんにもっと激しく言ってもらいたいと、時々思うくらいです。

●永遠の生命を受ける

「しょうがないね、お前たちは、そうやって永遠の生命がいらないなら。だから、私は異邦人にやってきたんだ」

と、パウロははっきり言っている。

「異邦人につかわされた。ユダヤ人はあいかわらず、旧約に、モーセに留まっているな。それではしょうがないよ。先にキリストをよそに伝えて、それでいよいよ

ダメになったら、その時にはキリストに立ち帰れ。ユダヤ人が救われる時に初めて、その時がもう歴史の終りだ」

と、パウロはロマ書の9章以下でもってそのことを言っている。相変わらずイスラエルでは、キリストを受けとらないものな、ユダヤ教は。

47**それ主はかく我らに命じ給えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救いとならしめん為なり」』** 48**異邦人は之を聴きて喜び、主の言をあがめ、又とこしえの生命に定められたる者はみな信じ、** 49**主の言この地にあまねく弘りたり。**

楽しいことが書いてあるね。これではっきり分かるです、

「永遠の生命」

を本当に受けるか受けないかでもって。ユダヤ人は永遠の生命を受けそこなった、律法の中に。だけれども、イザヤ書なんか読むと、これは永遠の生命の世界だ、預言者の世界は。ユダヤ人は本当は、預言者も受けとってない。イザヤにしろエレミヤにしろ、もうエホバの霊が澎湃としてさかまくようになるよ、身体の中に。それが永遠の生命の世界だ。だけれども、本当に永遠の生命そのものを実際になさったのはキリストだけです、なんと言ったって。

50**然るにユダヤ人ら、敬虔なる貴女たち及び町の重立ちたる人々を唆かして、パウロとバルナバとに迫害をくわえ、遂に彼らを其の境より逐い出だせり。** 51**二人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。** 52**弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされ居たり。**

バルナバとパウロの他に、少し他にいたらしいね、「弟子たち」と書いてあるから。主にこの二人でしょうけれども。

●神の無相の相

今日読んだところで一番はっきりしているのは、13章の10、11節。

10**『ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、** 11**視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに瞹と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。**

御霊の力、本当に御霊の権威です。それで、パウロの伝道は決して単なる言葉の伝道ではない。聖霊の力をもって証しながらの伝道です。後の方では、

「毒蛇に咬まれていたけれども、ちっとも毒が回らなかったのでびっくりした」

なんて書いてある。

「神のすがたに即して造られた」

という。「似姿」という訳は私は嫌いなんだ。神のすがたと同じに造られた。我々は本来、

「神の無相の相」

を持っている。「神のすがた」と言ったって、これは無相の相だからね。自由自在な相です。あなた方一人一人に神の、キリストの無相の相が宿っている。それがその人らしく展開していくわけだ。人真似はひとつも要らん。その人らしく展開していく。それで、これが神の栄光を現す。それを人に示し、人に与えていく。与えられた人は、その人の真似をするんじゃないですよ。与えられた人らしく、その人らしくいよいよキリストを証していく。ドイツ人やイギリス人やアメリカ人や日本人や、福音の受け方はそれぞれでいいんだよな。

「こういうように受けなければならない」

ということはない。ただ、

「本ものがどのようにそこで本当に咲くか、果を実らせるか」

それが証しされなかったら、本当の意味で受けとっているんじゃない。日本人は日本人らしくで、一向に差し支えない。

ロシアという大国、もう国家連合みたいだね。国家連合みたくなって、それぞれの独立性を認めているんだから、変わったものだよね。そして、それが本当に一つになっていきましょうというためには、その一つとなる一番のもとは、霊界の太陽キリストなんです。これを受けとっていれば、それが赤になったり、青になったり、紫になったり、いろいろに、それぞれの民族性でも国家性でもいいんだ。

これは世界でも同じことだ、どこの国でも。これが無くなってしまっている民主主義なんてものはダメだ。日本の民主主義はこれがない。

「アンダー・ゴッド」（神のもとに）

でないからいかん。アンダー・ゴッドでないような教育なんかは一つも教育にならない。日本の教育には愛想を尽かすのはそこですよ。私はそれを言ったんだ、はっきり。

「校長さんたち、山に籠もって瞑想し祈ってから教育しようじゃないですか。この世界を持たなければダメですよ」

と。

では、おしまいにします。